



味坂っ子だより

小郡市立味坂小学校
学校だより 特別号
令和8年 9月 2日
校長 江上 征一

～学級分会号～※10日の参観・分会にご持参ください

【人権学習参観・学級分会へのご参加、よろしくお願いします!】

味坂小学校では、今年も9月10日(木)に人権学習参観・学級分会を行います。
本年度は、「友だちや他との関わりに『わくわく感』を感じる子」をめざして日々取り組んでいます。本校は、学級の友だちとの関わりはもちろん、縦割り班活動の中で異学年の子どもたちと関わったり、学習の中で多くの地域の方々と関わったりします。その関わりを通して「〇〇さんの力になれてよかった」「〇〇さんともっと話したい!」「自分も〇〇さんのようになりたい」等の気持ちを膨らませ、「もっと人と関わりたい!」「人と関わり合うとわくわくする!」という気持ちを膨らませ、行動にうつさせたいと思っています。そのためには、関わりを通して互いを知り、互いを尊重することが大切です。その中で人権感覚を高めていくのです。

やがてその感覚が大きくなっていき、日常生活の中の「おかしい」と思ったことを「おかしい」と言える子、「やめて」と言える子、「やめようよ」と言える子、そして段々と視野を広げ、「差別をしない、受けない、させない子どもたち」につながっていくのだと思っています。このような子どもたちは、1,2年間の取組では育ちません。下の図のように、6年間をかけて、また中学校も含めて9年間かけて育てていきます。低学年から順序だてて様々な学習に取り組み、人権感覚を高め、社会の中の様々な差別へと視野を広げ、6年生での部落問題学習につながっていきます。世の中にある、部落差別をはじめとする様々な差別の実態を知り、正しく学び、自分ごとで考えることで、差別は無くなる、いや、無くさなければならぬ、そう思い行動できる子どもたちや大人をめざして、私たちと一緒に考えていただけませんか。

【各学年で学習する内容とねらい】

◆6年生「差別を受けていた人々～室町時代の庭師～」

差別とは、人の心が生み出した「差別をする側の問題」であることに気づき、差別が当たり前だった世の中について考える。

◆5年生「ちがいのちがい」

「あっていいちがい」と「なくしていききたいちがい」があることに気づき、よりよい社会を創っていくための見方・考え方をもつ。

◆4年生「わたしのせいじゃない」

お話を通していじめの構造を考え「無関心な人」も「傍観者」も、差別を助長し、差別をしているのと同じであるということに気づき、自分に何ができるのか考え行動できる。

◆3年生「あしなが」

よく知らないのにうわさをするこやうわさを鵜呑みにすることにおかしさを感じ、正しいことを知るために事実を確かめることの大切さに気付く。

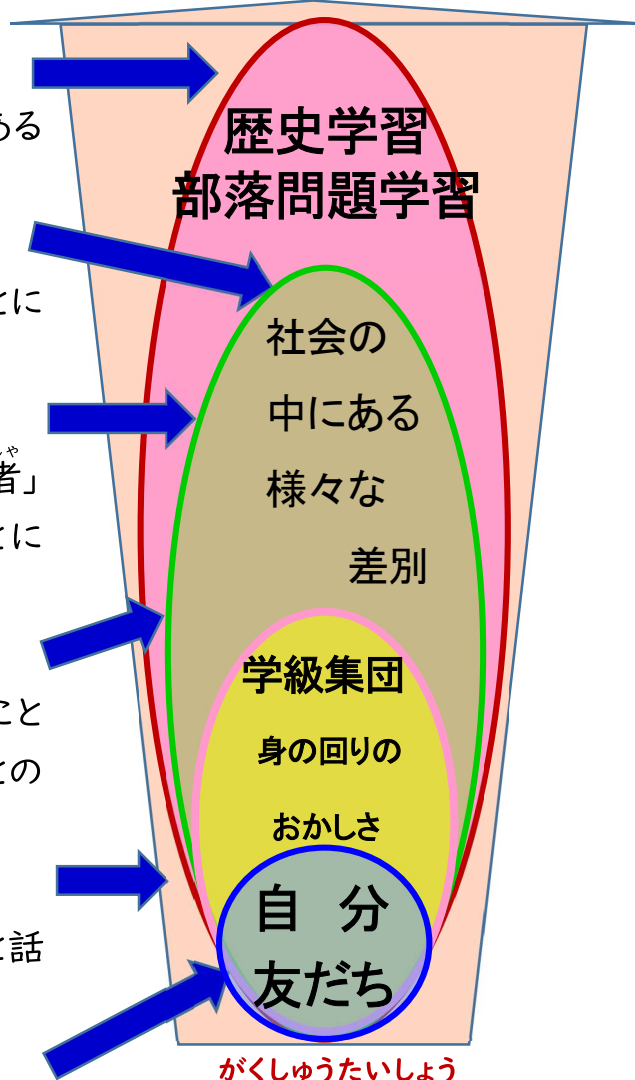
◆2年生「われた かびん」

決めつけた見方をする動物たちのおかしさに気づき、相手と話したり事実を確かめたりして友だちを大切にしようとする。

◆1年生「かみひこうき」

かみひこうきを折るために選んだ色を「女いろ」と言われた主人公の気持ちと行動を考え、そこには偏見があり、人にはそれぞれ好きなものがあり、認め合うことの大切さに気付く。

友だちや他との関わりに「わくわく感」を感じる子
差別をしない、受けない、させない子



部落差別をはじめとするあらゆる差別をなくそうと行動する力

いじめや差別を見抜く力

決めつけや偏見のおかしさに気付く力

ちがいを認め合う力

【学習対象】

【人権感覚】

今号では、今一度「差別とはなにか」という原点に立ち戻り、そこから「部落差別」について考えたいと思います。

【そもそも「差別」とは?】

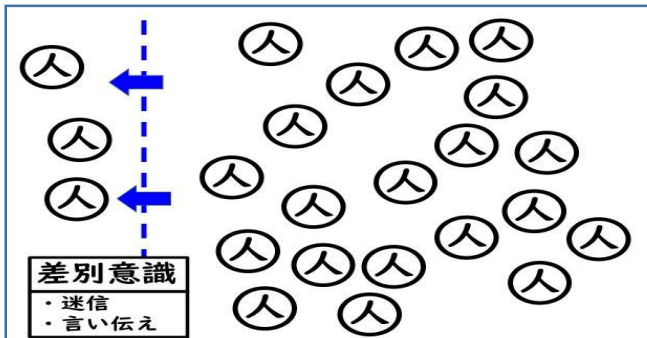
そもそも「差別」とは?

自分に都合のよい見方で
わざわざちがいをつくって
排除したり支配したりすること



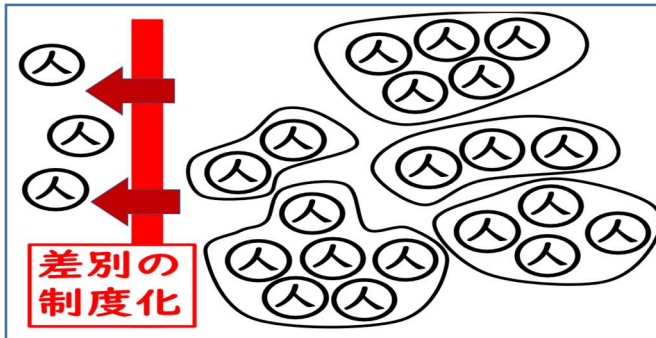
味坂小学校では、「差別」を「自分に都合のよい見方でわざわざちがいをつくって排除したり支配したりすること」と捉えています。そう考えると「わざわざちがいをつくる」のは「差別をする側」であり、「差別をする人がいるから差別が存在する」ということになります。いじめや、部落差別をはじめとするあらゆる差別は、このようにして存在するのです。

【では「部落差別」とは?】⇒江戸時代に人々の差別心・禁忌意識を利用して制度化された(つくられた)差別

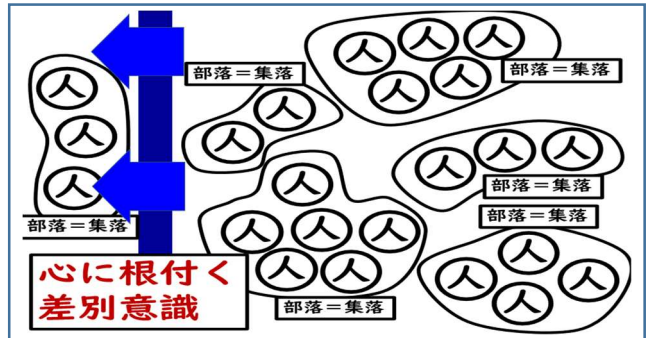


室町時代、当時の人々の中に、特定の職業に従事する人々に対する「自分たちとは違う力をもっているのではないか」という意識が、やがてその人たちと距離を置く「差別」へと変わっていきました。その根底にあったのは、当時の世の中に広まっていた「迷信」や「言い伝え」等でした。

このようにして、本来同じ人間として違いのないところに違いが生まれてしまい、差別意識が



江戸時代になると、江戸幕府は人々への支配を強めるために「身分制度」をつくりました。そして、人々の中にあつた差別意識を利用し、当時差別を受けていた人々への差別を制度化しました。つまり、差別に対する「お墨付き」をもらったのです。そのため、人々は、あからさまに差別をし、差別を受けてきた人々を、あたかも自分たちとは違う存在だとする考えが根付き、正当化されました。当時は交流をすることさえ禁じられてい



明治時代になると、政府は「身分制度」を廃止しました。しかし、差別を禁止する法の整備などを全く行わなかったため、人々の心に根付く差別意識は消えませんでした。それどころか差別は強くなってしまいました。そして、特定の部落(本来は集落という意味)に対して、結婚や就職の差別、自由の迫害などの様々な差別が起こりました。これらの差別を総称して「部落差別」というのです。

いかがでしょう。この図のように、室町時代以前からあつた人々の差別意識が時代を経てもなお現在も残っていると云えます。つまり、部落差別は、人々の意識が生み出し、長い歴史の中で、差別意識が悪い意味で代々受け継がれてしまい、現在に至っている、日本固有の根深い差別なのです。人の意識がつくった差別であるからこそ、人が差別を無くしていかないといけないのです。私たちはそれができると信じて様々な取組をしています。

【皆様からよく出される質問に対する Q&A】

Q1: そっとしておけば(わざわざ教えなければ)、部落差別はなくなるのではないですか?

部落差別に苦しむ人々が現在もなお残っているのは事実です。そっとしておくということは、部落差別があるという事実を隠すことです。部落差別を見て見ぬふりをしていることです。そっとしておくことは「寝た子を起こすな」論とも言われ、未だに部落差別が存在する大きな要因でもあります。

そっとしておいても、「あそこは..らしいよ」「部落の人間との結婚は許さない」等の差別意識だけは、残念ながら延々と受け継がれているのが現実です。また、現代のネット社会の中には、わざわざ差別を助長する、悪意をもった書き込みや動画等による差別が蔓延しています。そっとしておいても、教えなくても、必ず部落問題に出会うのが現代です。何も学ばないままでこのような誤った情報に出会ってしまったら、子どもたちは誤った情報を信じ、差別をする側に立つかも知れません。そうなれば、差別に苦しむ人々が「苦しい」「おかしい」と声を上げられなくなります。

この間違った意識の連鎖を断ち切るには、わたしたちが正しいことを学び、「おかしい」と立ち止まって考え、正しく子どもたちに伝えていくことしかないのではないのでしょうか。そのために制定された「部落差別解消推進法」では、部落差別の解消は国の責務であり、教育の責務と規定されています。「寝た子は正しく起こさなければならない」そのために1年生から段階を追って人権感覚を育み、6年生で部落差別の学習に取り組みます。

Q2: 署名活動は、部落の人々のためにあるのではないですか?

署名活動の原点は、高知県の部落の親たちの「教科書無償のための運動」です。「せめて我が子にだけは差別されることなく満足な教育を受けさせたい」という切実な思いから始まった運動が全ての子どもたちの教科書無償化に繋がったように、全ての子どもたちのために署名活動に取り組んでいます。皆様の署名活動の成果としていただいた「定数外」の加配教員は、全ての子どもたちのために活動し、学校や地域にとって絶対に必要です。加配教員は、県から必要ないと判断されれば、次年度から学校からなくなります。ですから皆様に署名をお願いしているのです。